

## 詩片々：詩

著者	松村，二郎
雑誌名	龍南
巻	2 1 1
ページ	9 - 1 6
発行年	1929-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6897">http://hdl.handle.net/2298/6897</a>

# 詩 片 々

松 村 二 郎

## 目的への第一歩

猫も杓子もゾロ／＼と俺の後を追つて来るんだ。

畜生！俺を氣狂ひと思つてあがる。

えゝい！致し方ない！

俺は遂々大道の真中に坐つて終つた。

諸君！俺は此の通り無能で放埒で野蠻である。

だが、俺には激烈なる情熱があるんだ。

之は他人の益にこそなれ決して害にはならないと信じてゐる。

それなのに、君達は俺がかうして自由に歌つて狂つて踊り廻ると、

まるで見世物のやうについて来るではないか！

俺は世の凡ゆる富や權勢や榮譽を無視してゐる。

俺の最高は純眞なる無我の亂舞なのだ。

正義と犠牲はその亂舞の唯一生命なのだ。

嗚呼—それにしても、數億年の歴史はこんなに畸形兒を作つて了つたのか！

オ、—俺は此の絶壁をブッテブッテブチ毀してやらうと誓つたが—

諸君！かうした君達の姿を見ると、

今更俺には折角潤みかけてゐた涙も出なくなつた。

構ふものか！のけ のけ のけつ！！

狂人だつたらどうしたつ、

それく歌つたりく！！

こりやくどんく！！

### 無 題 二 篇

天才が一介の凡人である日よ。

ほんとうにこんな長閑な日はない。

偽りがほんとうとなる日。

氣の弱い人には命の洗濯となる日よ。

### 夏 の 感 覺

無風狀態の烈日光線。



ザク／＼／＼さても官憲はホロ酔の上機嫌——  
ポケットを探つては知らぬ顔の素通りである。

大魚の腸詰ハラフタが濁る！

ボウボウボウ百の蒸發熱量！

飲料水の飛ぶは／＼！

群る苦力クワリの牛飲、極樂を食る一瞬の享樂、薄ら笑ひ、

蟹聲 惡臭 惡臭！

喧嘩！血闘！無拘束の實力抗爭！野性の跳梁！

生命が之程踴躍してゐることはない。

赤青の窓には裸体の女が蠱惑の大示威運動を！！

こゝばかりは蠅も犬も立派な人格である。

## 梅 雨

薄濁れる鈍色ニラの帳トバリ

一筋道は今か泣くやう

色褪せし書間酒場の赤旗は

ヒタ ヒタ ヒタ と

病める魔物のせゝら笑ひか。

朽土に埋る鐵古鏡に

映じ難なる心淋みしみ

何事の起る氣配として無けれど

鬱々たる懺心の惱み。

## 秋の感覺

(一)

水晶の衣裳を纏つた天女が

無際の硝子板上で昇天の曲を舞つた。

硝子の上には絶えず清澄な溪流が注がれてゐる。

天氣豫報は晴天 氣温二十度 南風 無速度 と報じた、

洗滌された脳髓が黎明の唄を唄った。

(二)

天上天下唯我獨尊か！

大きな脊伸び うわー！

(三)

舞臺には今絢爛花の如く美しい女が現れる。

「秋は山椒の入った汲物よ」女は言ふ。

観客は成程と思つた。

「愉快なこと」女ははれやかに舞ふ。

観客は皆愉快な氣になつた。

「淋しいわね」女が突然憂鬱になると

観客は等しく溜息をついた。

その時である！樂屋の一角から炎々たる煙が燃え上つたのは――

數千の客は叫絶して出口へと急いだ。

オ、その瞬間だ！戸外の冷氣がサット一陣！！

観客は始めて本當の秋を知つたのである。

(四)

大統領が故郷に錦を飾つて歸つて來た。

祝宴の席には鶴の卵が出され、

彼は非常な満悦であつた。

夫れは鶴の卵が美しい水で包まれてゐたからである。

(五)

幼い女の子が淡緑のリボンリボンを飾つてゐる。

鳶が一羽 高等飛行をやりながらそのリボンを啄いた。

(六)

柿、栗、

それから、子守の集ひ。(夕方に限る)

隣の餓飢大將がおきまりの兵隊ごつこを開始した。

(七)

陸軍大演習！

陸上競技大會！

政治シーズン！

女學生のピクニック群！



(八)

掲 示

各地に發生せるコレラは幸ひ次第に下  
火に向ひつゝあるも昨今朝晩の氣温に  
は頗る寒冷なるものあり各自に於て風  
邪にかゝらぬ様十分の注意あらんこと  
肝要なり。

(九)

凡て天地の現象は健康の女神の診察を必要とした。

(十)

凱旋將軍の威風凜凜たる馬上姿！

群衆の歡呼！

嚇々たる太陽！